

「けしきこころ」考

——上代における形容詞「けし」について——

細川 英雄

—

韓衣 裾のうちかへ 逢はねども 異しき心を（家思吉言）

許呂乎） 我が思はなくに （万葉・一四・三四八二）

あらたまの 年の緒長く 逢はざれど 異しき心を（家之

伎已許呂乎） 我が思はなくに（万葉・一五・三七七七）

『万葉集』に右に見えるような「けしきこころ」という表現

がある。あだし心、とか、浮気心、といった意味をあらわし、

ときに、心変わり等と、意識されることもあるが、このうちの

「けしき」という語がいずれも「こころ」にかかる連体修飾の

機能を果たしていることはその表現構成からも明らかである。

その際に、「けしき」は、形容詞「けし」の連体形として扱われることが多いけれども、すでに知られているように、上代において「けし」を活用させた形は「けしき」を除いて他には見られず、形容詞「けし」とは、連体形「けしき」の存在によって、いわば想定された形容詞であるということになる。

形容詞「けし」を立てる根拠としては、理不尽な、あるいは不埒な、とでも言うべき意味で現代語にもあらわれる「けしからん」や、すでに中古散文に多く見られる「けしうはあらず」・「けしからず」、また中世の「けしかる」等がいずれも「けし」と深い関係にあることをもって、歴史的な立場で、「けしから」（未然形）・「けしく（う）」（連用形）・「けしき」・「けしかる」（連体形）と活用しているとすることができ、その方面に関し

てはくわしい言及もある(注1)が、上代にさかのぼっては、冒頭にあげた『万葉集』の「けしきころ」の「けしき」のみであり、また、この「けしき」が中古へ受け継がれることなく、上代にしか見られないことから、簡単に形容詞「けし」というものを認めてしまうには多くの問題があるように思われる。本稿では、このような意味で、上代における「けしき」の意味をさぐり、当代の「けし」という形容詞の成立はきわめて薄弱なものであったのではないだろうかという私見を述べ、その際に「け」を軸とする「けに」・「けなり」・「けなる」等の語との関係について考えてみたいと思う。

二

遙々に 思ほゆるかも 然れども 異しき心を(異情乎)
我が思はなくに (万葉・一五・三五八八)

冒頭の二例と右の一例の計三例が『万葉集』において「けしき」と訓まれている用例のすべてである。このうち冒頭の二例が仮名表記されていることから、「けしき」という語の存在は確かなものであることがわかる。

三例とも用例で示したように「我が思はなくに」という一定の表現をともなって用いられており、「日本古典文学大系」に

「異しき心―あだし心。以下二句は愛情の変わらないことを誓う慣用的表現だつたらう」(『万葉集四』五八頁頭注)とあるように、「異しき心を我が思はなくに」という言い方は、常套的な表現として当時の人々に受け入れられていたのである。

では、「けしき」とはどのような構造の語なのだろうか。

『万葉集』において「けしき」と一字一音の仮名書き例は、先に示した「家思吉」・「家之伎」で、「けしき」の「け」は「家(甲類)」であるが、訓として「けしき」と訓まれている文字は、「記」・「紀」・「万葉」を通じて「異」字のみである。

ほぼ同義語ともいえる「あやし」・「く(す)し」には「怪(恠)」・「奇」が用いられ、「異」を「あやし」・「く(す)し」と訓む例も「記」・「紀」に見られるが、「けしき」の訓を持つ文字は「異」に限られていることに注目しておく必要がある。たとえば『万葉集』に「異」は四五例見える(篇外は除く)が、その内訳は次のとおりである。

* 「異」の音仮名・訓仮名・訓

音仮名として	い	2例
訓仮名として	け	39例
訓として	あた(だ)し	計 45例
	ことに	
	かたよりに	
	けしき	1例

まず「異」の訓は次のとおりである。

秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに (異所縁) 君に寄

りなな 言痛くありとも (万葉・二・一一四)

天雲の 寄り合ひ遠み 逢はずとも 異し手枕 (異手枕)

我まかめやも (万葉・一一・二四五)

紫草を 草と別く別く 伏す鹿の 野は異にして (野者殊

異為而) 心は同じ (万葉・一二・三〇九九)

右の「あた(だ)し」「ことに」「かたよりに」のように

「異」が訓として用いられている場合は、「他と異なる」の原

義が意味の上でいずれも保持されつづけていることが用例から
も知れる。

とくに「あたし」「あだし」の例見当らず。『観智院本類聚

名義抄』の「他」の項に「アタシ ホカ」(八仏上一九〇九)とある

は「異手枕」の他、『日本書紀』・『風土記』等にも「異俗人」

等と訓みならわしているが、「こと」に置き換えられて訓まれ

ることも多く、「けしき」と通うべき意があったと考えられる。

上代における「異」の訓の多様さは『万葉集』よりもむしろ

『記』・『紀』に見られるが、たとえば『古事記』において「異」

は次のようにあらわれている(注2)。

①定境開邦。制于近淡海。正姓撰氏。勒于遠飛鳥。
雖歩驟各異。文質不同。(序一ウ)

②令誦習帝皇日繼。及先代旧辞。然運移世異。未行其
事矣。(序三オ)

③僕欲往妣国以哭。爾大御神詔汝者不可在此国而。
神夜良比夜良比賜故。以爲請將罷往之状。參上耳。
無異心。(上一六オ)

④爾思怪。以御刀之前。刺割而見者。在都牟刈之大刀。
故取此大刀。思異物而。白上於天照大御神也。(上
二三ウ)

⑤豐玉毘賣之從婢。持玉器。將酌水之時。於井有光。

仰見者。有麗壯夫。(略)以爲甚異奇。(上五四オ)

⑥乃天皇驚起。問其后日。吾見異夢。從沙本方。暴雨

零來。急浴吾面。又錦色小蛇。纏繞我頸。如此之夢。

是有何表也。(中二九オ)

⑦此沼之辺。一賤女晝寢。於是日稜如虹指其陰上。亦有

一賤夫。思異其状。恒伺其女人之行。(中六六オ)

⑧於是其春山之霞壯夫。以其弓矢。繫孃子之廁。爾伊

豆志袞登賣。思異其花。將來之時。立孃子之後。入

其屋。即婚。(中六八ウ)

⑨・⑩太后幸行所以者。奴理能美之所養虫。一度爲蠶蟲。

一度為_レ飛鳥。一度為_レ飛鳥。有_レ麥三色之奇虫。看_レ行此虫而。入坐耳。更無_レ異心。如此奏時。天皇詔。然者吾。

思_レ奇異_レ故。欲_レ見行。自_レ大宮上幸行。入_レ坐奴理能美之家時。其奴理能美。已_レ所養之三種虫。献_レ於_レ太后。〔下七ウ〕

⑩其王等。因_レ无_レ禮而退賜。是者無_レ異事_レ耳。夫之奴乎。所

纏_レ己君之御手玉鈿。於_レ虜温_レ剗持來。即與_レ己妻。乃給_レ死刑_レ也。〔下一一オ〕

⑪此時。相_レ率市辺之忍齒王。幸行_レ淡海。到_レ其野者。各

異作_レ假宮_レ而宿。〔下二五オ〕

⑫是以意富_レ邪命。自_レ下幸而。少_レ掘其御陵之傍。還上。復_レ

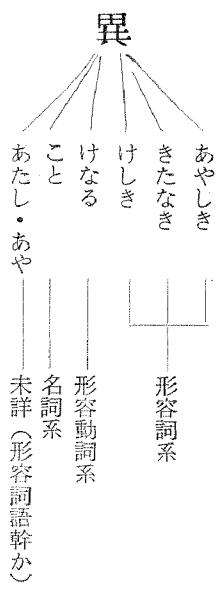
奏言_レ既掘壞_レ也。爾天皇。異_レ其早還上_レ而。詔_レ如何破壞_レ。

〔下四一オ〕

右の一三例のうち連体修飾の機能を持つ「異」は③④⑥⑨⑩の五例であるが、諸本には「あや」「あやしき」「きたなき」「けしき」「けなる」「こと」等とさまざまに訓まれている。

したがって、連体修飾の機能を有する場合の「異」の訓みは、

『古事記』・『万葉集』においては次のように図式化することができる。



これを意味の面から考えると、③⑨は國家（天皇）に対する^{たぐひ}二心とか謀叛心を示しており、⑥は夢の奇怪さ、不思議さ、④

⑪は他に対しての異常さをあらわしていることがわかる。このように見ると、「異」であらわされる語は表面的にはいく

つかの意味を持つように見えながら、実はすべてに共通する一つの本質的な意味があるといえるのではなからうか。すなわち

『万葉集』の「異心」は、別人に愛情を抱く心の意であり、『古事記』の③④⑥⑨⑩は右に示した意味であるところから、図式

の「あやしき」以下さまざまに訓まれている連体修飾の「異」の本質的な意味は、被修飾の体言の性質や状態が今までと異なることや、普通と違っていることをあらわすことになるのであ

らうと思われる（注3）。

したがって、図式に示した諸訓を訓み分けるべき意味上の、文構造上の根拠はなく、同義の「怪（恠）」・「奇」との用字上の

区別も特に見られない（注4）ところからも、「けしき」の

存在を裏付けるべき証しは得られないわけである。ただそれら「けしき」の訓はいずれも連体修飾の場合にだけあらわれ、終形「けし」その他の活用形の語形が諸本の訓に見えないことを付しておく必要があるだろう。

四

次に「異」が音仮名・訓仮名として用いられる場合について検討を加えてみよう。

音仮名「い」の例は次の二例のみである。

たらちねの 母が養ふ蚕の 繭隠り いぶせくもあるか
妹に(異母二)逢はずして (万葉・一二・二九九一)

…玉くしげ 二上山に 延ふつたの 行きは別れず あり
通ひ いや年のはに 思ふどち かくし遊ぶむ 今も(異
麻母)見ること (万葉・一七・三九九一)

訓仮名「け」は、「に」をともなう「けに」の用法と、そうではない用法の二つに大別することができよう。

① 「に」をともなわない例 17例

② 「に」をともなう例 22例

まず、①は

川の上の いつ藻の花の いつもいつも来ませ我が背子

時じけめやも(時自異目八方) (万葉・四・四九一)

三番原 布当の野辺を 清みこそ 大宮所 一に云ふ「こ
こと標刺し」 定めけらしも(定異等箱) (万葉・六・一〇五一)

天飛ぶや 雁の翼の 覆ひ羽の いづく漏りてか 霜の降
りけむ(霜之零異傘) (万葉・一〇・二二三八)

のように用いられており、訓仮名ではあるが、訓の項に述べたような「異」の意を有しているとは考えられず、仮名として機能していることがわかる。

次に②の「に」をともなう場合の用法について見てみよう。

④ 「に」の仮名表記のある例 4例

⑤ 「に」の仮名表記のない例 18例

④の四例は次のとおりである。

春日野に 朝居る雲の しくしくに 我は恋増さる 月に
日に異に(月二日二異二) (万葉・四・六九八)

…朝なぎに 千重波寄せ 夕なぎに 五百重波寄す 辺つ
波の いやしくしくに月に異に(月二異二) 日に日に見

とも今のみに 飽き足らめやも… (万葉・六・九三一)

…心痛き我が恋ぞ 日に異に増さる(日尔異尔益) 何時

はしも 恋ひぬ時とはあらねども…

…あしひきの この片山の もむにれを五百枝はき垂れ (万葉・一三・三三二九)

天照るや 日の異に干し(日乃異尔干) さひづるや 韓

白に搗き 庭に立つ(万葉・一六・三八八六)

右のうちの「ひにけに」は「日ごと」に。日ましに。日ニ異

ニという構成である(『時代別国語辞典 上代編』六一九頁)

とあり、上代の常套的な表現の一つである。「ひに」部分が、

日が経つにつれて、の意をあらわし、「けに」部分が、程度の

はげしくなる状態をあらわすと考えられるだろう。恣心の高ま

りや自然の移り変わりをあらわしたりする場合に、この「ひに

けに」が常套的な表現として当時の人々に受け入れられていた

ことは確かだろう。「月に異に」は「日」が「月」となり、ま

た「ひのけに」は「ヒニケニの訛つたものか」(前掲『時代別』

六一九頁)とある未詳の表現であるが、「けに」の意味構造に

変わりはないとみてさしつかえあるまい。

④の四例において「異」は、仮名として機能しながら、同時

に訓としての意味も保持していることになる。他に若干ではあ

るが、

秋と言へば 心を痛き うたて異に(宇多弓家爾) 花に

なそへて 見まく欲りかも (万葉・二〇・四三〇七)

のように仮名の「家」を用いている例も見られ、④の場合の

「異」はおそらく仮名として意識されていたのではなからうか

と思われる。

次に③「に」の仮名表記のない場合について検討してみよう。

「に」の仮名表記のない場合、すなわち、「異」が一字で「け

に」と訓まれていると考えられる場合の例である。

…大日本 久邇の都は うちなびく 春さりぬれば 山辺

には 花咲きををり 川瀬には 鮎子さ走り いや日異に

(弥日異) 栄ゆる都は… (万葉・三・四七五)

あしひきの 山辺に居りて 秋風の 日に異に吹けば(日

異吹者) 妹をしそ思ふ (万葉・八・一六三二)

妹が手を 取石の池の 波の間ゆ 鳥が音異に鳴く(鳥音

異鳴) 秋過ぎぬらし (万葉・一〇・二二六六)

里ゆ異に(里異) 霜は置くらし 高松の 野山司の色

付く見れば (万葉・一〇・二二〇三)

うたて異に(得田儂異) 心いぶせし 事計り よくせ我

が背子 逢へる時だに (万葉・一〇・二二九四)

③の場合にも「ひにけに」と訓まれる表現が多い(十八例

中「ひにけに」九例、「いやひけに」五例、「けに」四例)が、

その場合は「日異」と表記されており、「けに」の「に」と

も「ひに」の「に」の仮名も省かれている。ということ

「ひにけに」が当時の常套表現であったために、「日異」の表

記がすなわち「ひにけに」をあらわしたとも考えられるが、い

ずれにしても、「異」が一字で「けに」と訓まれ、程度のはげ

しいことを意味する点は④の用例によって証されるだろう。

以上のような①また②の④④の検討から、「異」には「け」・「けに」の訓假名(「けに」は訓とすることもできよう)が存在することがわかるが、このように「異」は假名、相当地また訓、相当地の両方に用いられつつ、しかもたとえば「異尔」のように仮名として使用されながら、訓としての「異」の意味は失われているわけではないことに注目しておきたい。その上、「異」を「けに」と訓む例から考えて、「異」は『万葉集』において「けに」という副詞的機能を果たす語としての意味を担う表記として特徴的であることがわかる。

このような状況からは副詞的機能の「けしく(う)」が導き出されることは困難であり、同時に連用形において「けしく(う)」のあらわれる余地はなかったではなからうか。

五

それでは、なぜ「けし」という形容詞は完全な形で文献上にあらわれなかったのだろうか。

わたくしはここで「けに」・「けなり」・「けなる」という「け」を軸とした一連の語の存在にあらためて注目したいと思う。

すなわち、前に述べたように「け」は「異」であり、本来、他と異なることをあらわすことが原義である(注5)。前節で

示したように「に」をともなって副詞的機能を果たす場合には「けに」となり、『万葉集』にはこの用法がきわめて多い(注6)。「に」はその接続から体言的な語につき、副詞的機能を果たすことになるが、その際の体言的な語は、きわめて独立性の高いものになる。すなわち、形容詞の語幹が独立性の強いことは従来より諸氏の説かれるところであり(注7)、「異」の場合も、「けに」の存在また「異」を形容詞的に活用させた「けし(き)」の存在から「け」の独立性の高いことが証明されると思われる。

したがって、「け」を軸にして展開される語としては、今述べたように副詞的機能を果たす「けに」が『万葉集』では多く、さらにこの「けに」と関係が深いと考えられる「けなり」・「けなる」が『日本書紀』の古訓に見えることも有力な傍証となるのではなからうか。

今陛下以_レ嗔猪故_二而斬_レ舍人。陛下譬無_レ異_二於豺狼_一也。

(紀・一四・雄略五年二月・前田家本訓)

沈水漂_レ著於淡路嶋。无_レ(其)大一圍。嶋人不_レ知_レ沈水。以_レ交_レ薪燒_二於竈_一。其烟氣遠薰。則異_二以獻_レ之。

(紀・二二・推古三年四月・岩崎本訓)

是歲。自_二百濟国_一有_レ化來者。其面皆斑白。若有_二白癩_一者乎。惡_二其異_二於人_一欲_レ棄_二海中嶋_一。

(紀・二二・推古二〇年五月・北野本訓)

阿部臣則問曰。何謂也。開其意。對曰。天皇尙思歎。詔

田本皇子。日天下大任也不可緩。因此而言。皇位既定。誰人異言。(紀・二三・舒明即位前紀・北野本訓)

乃使寵妃阿倍氏淨掃別殿。高鋪新磨。靡不具給。

敬重特異。(紀・二四・皇極三年正月・北野本訓)

このような点から考えて、他と異なる状態をあらわす場合には、古く「けに」・「けなり」・「けなる」という一連の語が用いられていたわけであり、「け」を形容詞的に活用させる「けし」は例外的な「けしき」を除いてほとんど発達する余地がなかったのではなからうか。

同義という点では「あやし」・「く(す)し」と重なりあう部分もあるが、「アヤシは靈異の事物の現象面に対する感歎であり、クスシがその神秘的な原動力に対する感歎かと思われる」(前掲『時代別』五〇頁)という両者の違いに対して、他と異なったり、従来と違う状態をあらわす「けなり」(「けに」・「けなる」を含む)の存在はかなりの勢力を有していたのではあるまいか。

「あやし」が「感動詞アヤを形容詞化した語か」(『岩波古語辞典』六一頁)とあるように、「あやし」の構造であるとするならば、副詞「あや・に」の存在は、「け・し」と「け・に」

の類推を許すものであろうし、また上代において「くし」に「くしき」の連体形しかあらわれないことは「けしき」を誘発させる意味的形態的要因の一つであったのではなからうか(注8)。また、「けなり」と「けし」の対立を考える上で、時代的にはやや降るが形容動詞と形容詞が語幹を軸に交替する現象も参考に考えてよいのではなからうか(注9)。

したがって、『万葉集』における「けしき」の存在から形容詞「けし」を認めるとしても、この「けしき」はむしろ「けに」・「けなり」・「けなる」という同義語の中で「けしき」こそという固定した表現においてなれば偶発的に生じた語形ではなかつたのだろうか。そのために一般化することができず、形容詞としても各活用形を作り得るほどの勢力を持ち得なかつたのではないか。意味的に重なりあう「けなり」の発展の中で、「けしき」の成立はかほどに不安定なものであったと言えないだろうか。

*

以上、形容詞「けし」の成立について数少ない語例を手がかりに考えてみたが、この「けし」の不安定な成立事情が、後の「けしう」や「けしからず」等の諸語の表現と複雑に関係しているのではないかとも思われる。それらの諸語についての意味

的・形態的な相関関係については、またあらためて考える機会を持つことにして、ここでは「け」をめぐる語史の一環としてその起源的な問題についての私見を述べた。御叱正を仰ぐものである。

注(1) 山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館

昭15) 二三三～二三四頁

浅野信『俗語の考察』(三省堂 昭18) 二〇・四八～

五〇頁

浜田敦『肯定と否定』(『国語学』 1 昭23・10)

原田芳起『「けしうはあらず」考』(『解釈』昭33・1)

同『平安時代文学語彙の研究』(風間書房 昭37) 二

八六～二九八頁

本之下正雄『平安女流文学のことば』(至文堂 昭43)

八三～九一頁

吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(明治書院 昭

46) 一六二～一七四・一九二頁

鈴木一彦『日本文法本質論』(明治書院 昭51) 三～

一八頁

(2) 木村龍司『記紀論攷』(笠間書院 昭52) 九五～一〇

〇頁 参照

(3) 「け」が「異」に通じるとは、すでに山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』にも次のように指摘されている。

本居宣長はこれ(注II「けしう」)を釈して

けは異にてあやしからず也。奇妙をあやしと常に
いへば、云々

といへり。さらば「怪」の字音の方よく当れりとすべし。されど、この「怪」の語、万葉集時代より既にありといふも如何なれば、はじめは「異」の意なりしものが、平安朝時代に「怪^ケし」と化したるものと見るべきにあらむか。(二三四頁)

「け」の語源については、「怪」の音転とする説(『和訓栞』等)が古くからある。松岡静雄『日本古語大辞典』には「齋・浄に相反する概念を示す語で、ケガレ(穢)の原語。凶異の意にも転用された」とある。

(4) 前掲『記紀論攷』九八頁

(5) 「けしき」「けに」の「け」は「異」「家」の甲類の仮名であらわされている。「け」||「氣」として、「けしからん」等の「け」をもすべて統一的に考えようとする立場もあるが、「異」「家」は甲類、「氣」は乙類であることから一応否定せざるを得ない。

赤塚行雄『「気」の構造』(講談社 昭49) 参照

(6) 「け」に「に」のついた「けに」の形は馬淵和夫氏が

指摘される「形容詞発達の第一期」の状態であろう。

原田芳起氏は「けし」に「けしき」しか見られないこ

とから「形容詞としての活潑さはすでに失っていたも

のであろう」(前掲『平安時代文学語彙の研究』二八

六頁)とされるが、わたくしは発達し得ずに「けし

き」の形だけにとどまった形容詞であると考えたい。

馬淵和夫『上代のことば』(至文堂 昭43) 参照

(7) 山口佳紀「形容詞活用成立」(『国語と国文学』50・

9 昭48・9) 参照

(8) 「けし」・「くし」同様、一音節の語根に「し」のつく

ものでシク活用の語に「あし」があるが、「あし」の

場合は「あしかり」・「あしかる」等のカリ活用も上代

に見える。意味的には「わろし」(但し「わろし」の確

例は中古以後)と対応するもので、「あやし」・「くし」

・「けし」とは意味領域を異にするか。

(9) 北原保雄「形容詞『ヒキシ』攷」(『国語国文』37・5

昭43・5) 参照

* テキスト及び本文引用は次のとおりである。

『万葉集 本文篇・訳文篇』(瑞書房)

『古事記総索引 本文篇』(平凡社)

『国史大系 日本書紀 前篇・後篇』(吉川弘文館)

* 本誌創刊号(昭51・12)掲載の拙稿「馬実疾打莫行」

考―禁止表現史への一視点―に左記の校正上の誤りがあ

りましたので、おわびして訂正いたします。

誤 正

5 ページ下 2 行 提出されるのである 提出されるのである。(2)

6 行 決して悲し 決して悲し

10 ページ下 2 行 モトメナナソ モトメナナソ

下 4・5 行 ネココロモニ ネココロニ

14 行 すべてはナの直前 すべてはナの直前

11 ページ上 8 行 ネココロモニ ネココロニ

14 ページ下 4 行 ふれそも ふれそも

15 ページ下 15 行 活用語の終止接続 活用語の終止形接続

16 ページ下 7 行 打ちなきそ 打ちなきそ

18 行 ゆめ此たびにたつり ゆめ此たびにたつり

訂正とおわび

前号に下記のような校正上の誤りがありました。おわびして訂正致します。

誤	正
表紙 韓・日敬語の助動詞について 「けしきころ」考	→ 韓・日尊敬語の助動詞について → 「けしきころ」考 —上代における形容詞「けし」について—
P. 1 下l. 11 rokwr	→ rokwr
P. 2 上l. 1 cwki	→ cwki
l. 4 wi	→ ui
l. 5 twt	→ tuut
l. 9 twi	→ twui
l. 11 nohw	→ nohw
l. 16 sim	→ sin
下l. 7 rar-pyæŋ-ceŋ	→ rar-pyæŋ-ceŋ
P. 4 上l. 17 paŋ-a	→ paŋ-e
下l. 2 kunwn	→ kunwn
" wn	→ un
l. 5 che	→ che
l. 14 kyasyə	→ kyasya
l. 15 syə	→ sya
" kya	→ kyə
P. 5 下l. 1 hamyaŋwi	→ hamyaŋwi
" kyesi	→ kyəsi
P. 8 下l. 19 異	→ 異
P. 9 下l. 8 ㊹㊸	→ ㊸㊹
P. 11 上l. 1 乃 異	→ 乃 異
P. 12 上l. 13 なかったのでは	→ なかったのでは
P. 17 下l. 13 直首的	→ 直音的
(改) P. 21. 4 春秋國語	→ 春秋國語
P. 7 右l. 28 賈逵伝	→ 賈逵伝
P. 39 右l. 8 白孔六帆	→ 白孔六帖
P. 53 左l. 8 淮陰侯列伝	→ 淮陰侯列伝